

イエスの「成長」 ——『トマスによるイエスの幼時物語』の分析——

大川 大地
OKAWA, Daichi

目次

1. はじめに
2. 怒りと懲罰奇跡
3. 懲罰奇跡から治癒奇跡へ
4. おわりに

イエスは知恵、年齢、恵みにおいて成長した。

ὁ δὲ Ἰησοῦς προέκοπτε σοφία καὶ ἡλικία καὶ χάριτι.

——『トマスによるイエスの幼時物語』19:5

1. はじめに

新約聖書正典の4福音書は、イエスの幼児期についてマタイとルカに記された誕生物語とごく僅かな箇所を除いて完全に沈黙している。マタイは、その幼児期にイエスが家族と共にエジプトに避難したことを報告するが(マタ 2:13-23)、それ以外のことを語らない。ルカは神殿で律法学者と議論する12歳の少年イエスの様子を比較的詳しく報告するが(ルカ 2:41-52)、それ以前のイエスについては「子どもは成長して強くなり、知恵に満ちて神の恵みが彼の上にあった」(ルカ 2:40、私訳)との一文で済ませている。

一体、その誕生の時から(あるいはエジプトからの帰還の時から)神殿で律法学者と議論する12歳の時までの間、イエスはいかなる幼児期

を過ごしたのだろうか。後の時代のキリスト教徒が、正典福音書が僅かしか語らないイエスの幼児期の様子に対してこのような「敬虔な好奇心」⁽¹⁾を抱いても不思議ではないだろう。この好奇心に想像力を駆使して答えた書物が、本論文が扱う新約外典の一つである『トマスによるイエスの幼時物語』(以下、『幼時物語』と略す)⁽²⁾である。

はじめに本書の翻訳者でもある八木誠一の解説から引用する。

イエスが5歳から12歳の間に行った奇跡や神童ぶりをまことに大袈裟に叙述した伝説である。……内容的にもかなりひどいもので、正典福音書でのイエスの奇跡は人助けのためになされるという性格が強いが、ここではそういう奇跡がなされるだけではなく、少年イエスのお気に召さない人物はあっさり呪い殺されてしまう。……イエスらしさなどほとんどない、悪魔的で高慢な少年が描かれている。……幼時の奇跡的性格が強調されるのは、単なる聖者伝説の形成ということだけではなく、後に発揮されたイエスの異常な能力が、後天的に修練や学習によって展開したものではなく、全く生まれつきの賜物であったことを示すためと考えられる。それははじめからあったものだ、習得されたものではなく、いわんや架空のものでもない、⁽³⁾と言いたいのだろう。

八木が適切に解説しているように、『幼時物語』の描く少年イエスは、正典福音書の成人イエスと同様に至るところで奇跡を起こすが、その中には、正典福音書のイエスが人間に対しては決して行わない「懲罰奇跡」⁽⁴⁾(Strafwunder)が含まれる。このような呪いの奇跡は——U. U. Kaiserの言うように正典福音書のイエスもあらゆる時に穏やかな態度を取っているわけではないにしても⁽⁵⁾——、正典福音書に親しんだ読者にはいささか奇異なものに映るだろう。この書物は、成人期には「人助け」を行った「イエスらしい」イエスが、その幼児期には「悪魔的で高慢」な「イエスらしくない」イエスであったということを語ることで彼の幼児期に向けら

れた「敬虔な好奇心」を満足させているのだろうか。しかし本書は、「私たちの主、イエス・キリスト」(1:1)との賛栄で始まり、「世々、彼に栄光あれ」(19:13)との頌栄で終わる、大きなインクルージオ構造を持っており、「悪魔的で高慢な少年」を描くことには明らかに関心がない。では、少年イエスの懲罰奇跡は一体何のために語られているのだろうか。

また、八木の言うように、本書がイエスの奇跡能力を「全く生まれつきの賜物」として描いていることは明らかであるものの、その奇跡能力は果たして後天的に何も展開しなかったことになっているのだろうか。別の言い方をすれば、イエスは自らの能力の用い方について、何も修練や学習をせずに、つまり何ら成長することなく、突然にその奇跡を、懲罰奇跡から治癒奇跡へと変化させたのだろうか。

イエスの奇跡能力に対する八木の見解は、『幼時物語』をめぐる研究史の中で、多くの研究者に広く受け入れられている見解を踏襲しているように思われる。つまり、この書物は「成長する必要のないイエス」を描いている、との見解である(八木自身は「成長」の語を用いていないにしても)。このような見解は、筆者の知る限り、元来は O. Cullmann が主張し始めたもので、彼自身は『幼時物語』とグノーシス主義の関係を肯定するために仮現論(Doketismus)と結び付けてこの論を展開した。Cullmann によれば、「グノーシス主義者が必要としたのは、……すでに奇跡を行う無限の力を有しているため、実際には成長する必要のないイエスだった」⁽⁸⁾。また、新約正典・外典、使徒教父文書についての教科書を著した P. Vielhauer も本書について、「イエスの内的な成長を示すということからは物語の描写は全く離れている。……8歳のイエスは5歳の彼と全く同様にたちが悪く、5歳のイエスは12歳の彼と全く同様に利口である」⁽⁹⁾と書いている。グノーシスとの関係如何はともかく、これと同様の見解は、多くの学者に共有・前提されている、と言ってよい。だが、このような見解では、正典福音書の成人イエスの奇跡が治癒奇跡を中心にするのに対し、『幼時物語』のイエスが人を呪い殺すことの理由を上手く説明できない。繰り返すがイエスの奇跡能力それ自体は「全く生まれ

つきの賜物」であり、「イエスは奇跡行為を行うために公生涯の開始を待つ必要はなかった⁽¹¹⁾」。では、「成長する必要のないイエス」は、なぜその公生涯の開始から人間に対する懲罰奇跡を一切行わなくなるのか。一体、幼児期から変わらなかったはずのイエスは、いつ、なぜ、どのように、人を呪い殺す「悪魔的で高慢な少年」から、人助けを行う「イエスらしい」イエスへと変わったのだろうか。

本論文は、『幼時物語』に対する上記のような解釈に対して、一つの代案的な解釈の可能性を提示する⁽¹²⁾。新約外典一般について解説した荒井献によると、「多くの場合外典は、正典の中に動機はあるけれどもその記事が欠けている部分を想像力によって補足する傾向を持つ⁽¹³⁾」。『幼時物語』の場合、「正典の中に動機はあるけれどもその記事が欠けている部分」とは、まさに上述のルカ 2:40 の一文であるだろう。そうすると、この書物を生み出した者（たち）の関心も自ずと明らかになるように思われる。イエスは、どのように成長し、強くなり、知恵が増し、神の恵みを得るようになったのか。恐らくはこの問いこそが『幼時物語』を成立せしめたと思われるのである。

本論文は、『幼時物語』の成立年代や著作原語、オリジナル・テキストの確定などの「通時的」な課題を一旦括弧にくくり、「イエスの成長物語」として『幼時物語』を理解しようとする。すなわち、『幼時物語』には、「物語りの一貫した筋というものがなく、個々の段落が緩やかに繋ぎ合わされているだけ」とする W. レベルの見解⁽¹⁴⁾に対し、『幼時物語』を一貫した筋を持った文学作品として理解し、その構造を、全 19 章の物語全体と個々の奇跡物語の両面から分析することで、『幼時物語』が「イエスの成長」をテーマとした文学作品である、との仮説を提示することが本論文の目的である。第 2 章では、物語全体の構造を提示した後に、『幼時物語』5 章までに語られる懲罰奇跡を、奇跡行為者イエスの感情や彼の奇跡に対する周りの者からの反応に焦点を当てて分析し、続く第 3 章では、それ以降の治癒奇跡を同様の視点から分析する。この分析によって仮説を論証し、最後の第 4 章でまとめを行うと同時に若干の問題を提起する。

2. 怒りと懲罰奇跡

『幼時物語』全19章の構成を提示すると以下のようになる(アラビア数字番号は章番号に対応。各段落最後の括弧内は物語上のイエスの年齢⁽¹⁶⁾)。下記から明らかなように、『幼時物語』は、物語の進行に従ってイエスの年齢⁽¹⁷⁾が上がるという明確な構成原理を持っている。

1. プロローグ
2. イエスと雀の奇跡(5歳)
3. 律法学者アナスの息子を呪い殺す(5歳)
4. 自らの肩にぶつかった少年を呪い殺す(5歳)
5. 父ヨセフとのやりとり、父に自らを訴えた者達を失明させる(5歳)
6. 教師とのやりとり①(5歳)
7. 教師ザアカイの嘆き(5歳)
8. イエスの呪いのもとに倒れた者がみな癒やされる(5歳)
9. 屋根の上から落ちた子どもの蘇生(5歳)
10. 出血多量で死んだ若者の蘇生(5歳)
11. 水かめを割って困っている母のもとに服を使って水を運ぶ(6歳)
12. 一粒の麦から約4万ℓの麦がとれ、貧しい者に与える(8歳)
13. 寝台作りに困っていた父のために二枚の板を同じ長さにする(8歳)
14. 教師とのやりとり②、イエスを殴った教師が呪われる(8歳)
15. 教師とのやりとり③、教師②の癒し(8歳)
16. 蝮に噛まれて瀕死の兄弟ヤコブを癒す(8歳)
17. 病気で死んだ近所の赤ん坊の蘇生(8歳)
18. 工事現場の事故で死んだ者の蘇生(8歳)
19. 神殿での少年イエス≡ルカ福音書2:41-52(12歳)

以上から明らかなように、『幼時物語』の中でイエスは15の奇跡行為を行う。章番号で簡単に分類しておくと、懲罰奇跡が3、4、5、14、治療奇跡が8、9、10、15、16、17、18、その他が2、11、12、13である。⁽¹⁸⁾

既に安川哲夫が指摘しているように、「幼時物語で語られるイエスの奇跡は決してランダムに配置されているのではない」。⁽¹⁹⁾一見して明らかなように、15の奇跡の内の四つの懲罰奇跡は、その三つが冒頭（全19章の内の5章まで）に集中している。つまり、『幼時物語』に語られるイエスの奇跡は、人を呪い殺す懲罰奇跡と、人を癒す治癒奇跡に大きく二分することができ、⁽²⁰⁾前者を意図的に物語の冒頭に配置しているということである。⁽²¹⁾まず冒頭に配置された三つの懲罰奇跡（3:1-5:5）を検討してみよう。

3:¹ さて、律法学者アンナスの息子がそこでイエスの傍らに立っていた。彼は柳の枝を取り、イエスが集めた水を流してしまった。²これを見て、イエスは怒り、彼に言った。「何をする、不敬虔な愚か者め。穴と水がお前に何の悪事をなしたのか。見よ、お前は木のように枯れて、葉も根も出さずに実も結ばない」。³するとその子はすぐにすっかり枯れてしまった。イエスは立ち去り、ヨセフの家に帰った。枯れた少年の両親は少年の若さを嘆き悲しみながら死体を抱えてヨセフのところへ運んでいき、あなたの子はこのようなことをする子だ」と責めた。

4:¹ それからまた村を通っていると、子どもが駆けて来て肩におつかった。そこでイエスは腹を立て言った。「お前はもう道を歩けない」。²子どもはすぐに倒れて死んでしまった。³ある人たちが出来事を見て言った。「この子はどこの生まれか。その言葉はみなすぐに成就する」。⁴死んだ子の両親はヨセフを非難して言った。「あなたがこのような子を持っている限りは、村と一緒に住むわけにはいかない。子どもに祝福して呪わぬように教えなさい。私たちの子どもを殺すのだから」。

5:¹ それでヨセフは子どもをひそかに呼んで、叱って言った。「なぜこのようなことをするのか。あの人たちは困り、我々を憎んで迫害している」。²イエスは言った。「私には私の話すことが私の言葉でないことは分かっている。あなたのために黙っていよう。しかし

彼らは罰を受ける」。すると彼を訴えた人はすぐに目が見えなくなった。³ これを見た人はひどく恐れ困惑し、その言葉は善いものも悪いものもすぐに成就して奇跡になると言った。⁴ ヨセフはイエスがこのようなことをしたのを見て、立ち上がり、その耳をつかんでひどく引っ張った。⁵ そこで子どもは怒って言った。「あなたは探しても見つけられない。あなたは実に賢くないことをした。私があなたのものだと言うことが分らないのか。私を悲しませるな」。

佐藤研によると、懲罰奇跡は、(1) 悪しき行為の確証、(2) 霊能者による叱責および懲罰宣言、(3) 懲罰奇跡の実現(すぐに)、(4) 懲罰奇跡の確認、の四つの要素から成り、⁽²²⁾ 『幼時物語』の冒頭の三つの懲罰奇跡もこの構成要素を忠実に踏襲している。⁽²³⁾ だが、『幼時物語』の懲罰奇跡は、新約正典や外典の他の懲罰奇跡には見られないもう一つの重要な構成要素を持っている。それは、三つの懲罰奇跡がすべてイエスの「怒り」の感情に言及する点である。⁽²⁴⁾

律法学者アンナスの息子に、自らが穴に集めた水を流されてしまったイエスは「怒り」(ἡγανάκτησε)、少年の全身を枯れさせてしまう(3:2-3)。前方から駆けてくる少年に肩をぶつけられたときも(文脈上、明らかに故意ではない)、⁽²⁵⁾ イエスは「腹を立て」(πικρανθείς)、その少年を呪い殺してしまう(4:1-2)。イエスを父ヨセフに訴え出た人の目が見えなくなったとき、イエスは「彼らは罰を受ける」(5:2)と宣言するのみであるが、そのすぐ後、このことを知った父に、耳をつかまれてひどく引っ張られ(5:4)、イエスはそれに「怒って」(ἡγανάκτησε)父親に反論する⁽²⁶⁾ (5:5)。『幼時物語』の冒頭に連続して置かれている三つの懲罰奇跡が全て、イエスの「怒り」の感情に言及していることは、その他の奇跡がイエスの感情に一切言及しないことと比べると、極めて重要である。つまり、『幼時物語』の懲罰奇跡は、少年イエスの怒りの感情と関連付けられており、このことは、幼いイエスが自身の怒りの感情を制御する術をまだ知らず、それを一気に人を呪い殺す懲罰奇跡へと転化させることを制御する術も

身につけていない、ということを示唆するのである。これを裏書きするように、父に向けてイエスは「私には私の話すことが私の言葉でないことが分かっている」(5:2)と「言い訳」をする⁽²⁷⁾。

次に、懲罰奇跡に対する周りの者の反応を見ておこう。最初の二つの懲罰奇跡は、子どもの死の後に、非難のために両親が登場するという構図を繰り返している。水を流してしまっただけで息子を殺されたアンナス夫妻は、「嘆き悲しみ」、イエスの父ヨセフを非難した(3:3)。肩がぶつっただけで子どもを殺された両親もヨセフを咎め(4:4)、「憎み、迫害」した(5:1)。ここで、イエスの懲罰奇跡の「被害者」の両親による非難が、イエス本人ではなく父ヨセフに向けられていることに注意しよう。まず、イエスは、自身の懲罰奇跡行為が親に迷惑をかけることを知る。だからこそイエスは「どうしてこんなことをするのだ」といましめる父親に対し、「あなたのために〔今後は〕黙っていよう」と応えるのである(5:2)。だが、イエスにはまだ、人を呪い殺す懲罰奇跡そのものを止めない限り、「あの人たち〔=『被害者』家族〕も困り」(5:1)、両親も困る状態が改善されないことが理解できないので、次は、自身を告発した者の目を見えなくさせ、父親からの「体罰」を招いてしまう。この後に「私を悲しませるな」(μή με λύπει, 5:5)というイエスの言葉が置かれているのは偶然ではない。要するに、イエスの懲罰奇跡行為は、人を恐れさせ困惑させ(5:2)、両親を困らせ、怒らせてしまい、そのことがイエス自身の悲しみと直結する。

さて、この三つの懲罰奇跡の後、イエスは教師ザアカイのもとへ送られる⁽²⁸⁾。このことをきっかけにイエスの奇跡が懲罰奇跡から治癒奇跡へと変貌する。確かに、「神童」イエスは、この教師を「偽善者」呼ばわりし、「アルファの本性も知らないくせに、何故他の者にベータを教えるのか」(6:19)などと生意気な口をきき、ギリシャ文字アルファの字形についての解説を教師にぶつ(6:23)。だが、イエスはただ文字を学ぶためだけに教師のもとに送りだされたのではなかった。ザアカイは父ヨセフに次のように言う。「あなたの子どもに文字とともにあらゆる知識を授け、目上

の人には挨拶し、先祖や父のように敬い、そして同年の仲間を愛することをお教めしましょう」(6:2)⁽²⁹⁾と。要するに、イエスは、「社会性」を身に付けるために教師のもとへ送られる。繰り返すが、これをきっかけにイエスの奇跡の性質が変貌することになる。⁽³⁰⁾

3. 懲罰奇跡から治癒奇跡へ

ザアカイを言い負かした後、イエスの最初の治癒奇跡が生じる。⁽³¹⁾「そして少年が語り終えると、彼の呪いのもとに倒れた人たちはみなすぐに癒された」(8:3)。第1の治癒奇跡は「少年を怒らせる者はいなくなった」(8:4)との句で終わるが、これは今までの三つの懲罰奇跡が全てイエスの「怒り」に結び付いていたことを思い起こすときに理解可能である。確かに、周りの人々がイエスを怒らせなくなったのは、再び呪い殺されないようにという「恐怖」の感情からであるが、イエスが他者を呪い殺す外的な理由はこれではなくなった。しかし、重要なことは、イエス自身が「成長」していることである。そのことを以下確認する。

第2の治癒奇跡は、「それから何日かの後」、イエスが友だちと屋根の上で遊んでいる場面から始まる(9:1)。一緒にいた少年が屋根から落ちて死んでしまい、その子の両親が登場する。子どもが死んだ後にその子の両親が非難のために登場する構図は、3-4章の懲罰奇跡で描かれた構図であった。しかし、今回は様子が異なる。死んだ子の両親はイエスに罪をなすりつけ、「自分がやったのではない」と述べるイエスを脅かし続ける(9:2)。これは、『幼時物語』の中で、はじめて、イエスに直接向けられる非難である。先に確認した通りに、これまで非難はイエスの父に向けられており、それはイエスが実際になしたことに基づいていた。今回は、イエスは自らに直接非難を受け、自らがしてないことを非難されている。ここで『幼時物語』は、子どもの死の場면을提示し、その子の両親を非難のために登場させることで、明らかに以前の懲罰奇跡と今回の治癒奇跡を対比させており、非難の矛先を直接にイエスに向けることで、言わばイエスが最も怒りそうな場면을提示しているのである。ここでイ

イエスはあからさまに一つの「挑戦」を受けていると言える。しかし、イエスは怒らない。それどころか、死んだ少年を生き返らせる。これは純粹に人助けのための奇跡というよりは、自らの無実を証明するための奇跡ではある（「起き上がり私に言ってくれ。私が突き落としたのか」。彼はすぐに起き上がって言った、「いいえ、主よ。あなたは落としたのではなく、起き上がらせたのです」[9:4-5]）。しかし、その結果、イエスは、自らの奇跡の性格が変わることで、周りの人々の反応が変わることを学ぶのである。もはや、周りの人は、イエスを非難することもなく、恐れて怒らせないようにするのでもなく、「神を讃え、イエスを拝む」（9:6）ようになる。以下、イエスは連続して治癒奇跡と人助けのための奇跡を行い続け、両親の態度も変化する。母親はイエスに接吻し（11:4）、父親は彼を抱きかかえ、「私は幸せだ」と言う（13:4）。

17章に語られる治癒奇跡もまた、冒頭の懲罰奇跡と巧妙に対置されていることが確認できる。17章は再び子どもの死の場面から始まる。先に確認したように、『幼時物語』では、子どもの死の場面が提示された後は、死んだ子の両親が非難のためにイエスないし父ヨセフのもとを訪れる構図を繰り返していた。しかし今回の治癒奇跡では、その構図が転倒されている。すなわち子どもの死を嘆く両親がイエスを訪れるのではなく、その両親のもとにイエスが駆けつけるのだ（17:1）。また、かつて「私の話すことが私の言葉ではない」と言っていたイエスは、今回は、「私はあなたに言う」（σοὶ λέγω）と宣言してから治癒の言葉を発する（17:2、18:2）。群衆も、懲罰奇跡に驚いて言った「その言葉はみな成就する」（4:3）を繰り返すが（17:4）、もはや「この子はどこの生まれか」とは問わない。群衆にとって、治癒のために、自ら死人のもとに駆けつけるほどに成長したイエスは、「天からの者」（18:3）、「神か神の使い」（17:4）であることは明らかだからである。

群衆は最後に次のように感嘆する。「多くの命を救ったが、一生の間救うことができるだろう」（18:3）。このような感嘆の後に、正典福音書ルカ 2:41-52 をほぼそのままの形で採録して『幼時物語』が終わるのは実

に意図的な構成なのである。冒頭に指摘しておいたように、もはや正典福音書のイエスも人に対する懲罰奇跡を一切行わない。

4. おわりに

以上の論述を短くまとめる。

『幼時物語』に描かれるイエスの奇跡は、懲罰奇跡と治癒奇跡に大きく二分することができ、前者は物語の冒頭に集中している。物語の進行に伴ってイエスの年齢が上がるという構成原理を持っている以上、本書がイエスの年齢がより低い時期に懲罰奇跡を集中させていることは明らかである。また、冒頭に語られる懲罰奇跡は全てイエスの「怒り」の感情に言及しており、このことは若いイエスが未だ、自身の怒りを一気に呪いへと転化させることを制御する術を身につけていないことを示す。さらに中盤以降に語られる治癒奇跡は、冒頭の懲罰奇跡の構造を巧妙に転倒させることで、イエス自身が「成長」したことを示す。つまり『幼時物語』のイエスは、自らの奇跡が周りに及ぼす影響を学び、人を癒し、人の役に立つ方向へとコントロールする術を徐々に習得する。この書物は、そのような構成を採用することで、すなわち、奇跡をめぐる成長するイエスを描くことで、新約正典に欠けているイエスの「成長」を補足しているのである。

佐藤研は、イエスの「成長」について、従来の聖書学を批判しつつ次のように記す。

歴史上のイエスも、当然ながら発展し、「成長」していったと想定される。この極めて通常の人間理解が、イエス研究には長い間通用しなかった。それはイエスがやはりかつての「神の子」の権威を背負っているからであり、「神の子」には恐れ多くも通常の人間の子のような進展なぞあり得ないからである。ルカ福音書2章41-52節の「12歳のイエス」が、すでに大人の律法学者らも父母も太刀打ちできないほどの知恵を有しているという挿話は、この信仰を映像化

したものには過ぎない。また、大部分の聖書学者たちが、そのイエス像を初めから終わりまで等質の理想体として描くのも、同様の無意識的想定によるものである。⁽³⁵⁾

最後に、相当ていど仮說的にならざるを得ないが、本論の考察と上記の佐藤の指摘をふまえつつ、「神学的教訓は極めて少ない」⁽³⁶⁾とも評される『幼時物語』の「神学」について、一つの想像を呈して本稿を閉じたい。

イエス・キリストが真の神にして真の人であるという教理（両性論）が、「異端」を排除することでキリスト教の内部に「正統」の位置を占めたのは5世紀になってからである。それまでは——地域によって異なるものの——イエスの神性のみを強調する単性論が教会の一部に存在していた。単性論は、イエスのこの世の人間としての生を否定することにその特徴を持つ。イエスの人間としての性質を「そのように見えた」のだと考える仮現論も同様の根から生み出された思想である。

『幼時物語』は、ナグ・ハマディ文書の発見まで、いわゆる『トマス福音書』と単純に同一視されてきたという事情もあり、Cullmann 以来——グノーシス主義という言葉を使うかはともかく——人間として成長する必要のないイエスを描いた「仮現論」の書物だとの見解が一般的であった。しかし、本論文は本書の奇跡物語の分析から、本書が「懲罰奇跡→治癒奇跡」という明確な筋立て上の展開を持っており、これによって「イエスの成長」を描いている、という一つの可能性を提示した。佐藤が言うように、人間は「成長」を必ず経験する。無論、人間は成人になってからも成長し続ける存在であるが、全ての人には子どもから大人へという成長プロセスが存在する。『幼時物語』は、正典福音書が一切関心を示さない、この成長プロセスに正面から向き合った書物だと思われるのである。

『幼時物語』のイエスは、確かに最初から超人的な奇跡能力を発揮する。その意味で本書はイエスの神性を極度に強調した書物である。だが、本論文の分析から次のようにも言えないだろうか。すなわち、イエスの生

涯にも「子ども時代」という人間ならば誰もが経験する一つの段階があり、幼いイエスは自らの奇跡能力をコントロールする術を知らなかった。『幼時物語』は、イエスがそこから徐々に成長したことを示すことで、読者・聴衆がイエスの人間性を見失わないようにしているのだと⁽³⁷⁾。『幼時物語』は、その意味では、イエスの神性と人性とを独特な仕方⁽³⁸⁾で結合させることで、後の時代の「正統教理」たる両性論を準備した書物だとも言えるのではないだろうか。

無論、これまで述べたことは一つの仮説と想像にしか過ぎず、『幼時物語』の全貌を解明するにはさらなる探究が必要とされる⁽³⁹⁾。しかし、「イエスの成長」に取り組んだこの書物は、「内容的にかなりひどい」(八木)という一言によって、キリスト教会や新約学研究から切捨て捨てられるべき無価値なものでは決してない、ということだけは強調しておきたい⁽⁴⁰⁾。

〈付記〉

本論文執筆後に、J. R. C. Cousland, *Holy Terror: Jesus in the Infancy Gospel of Thomas*, London: T&T Clark, 2017 が刊行されたが、参考することが出来なかった。本論文の主張を訂正する必要がある場合は、いずれかの機会に改めて公にしたい。また、本論文の原稿を編集委員会に提出後、立教大学、上智大学、東京大学の大学院生有志の勉強会にて同内容を発表する機会を得た(2017年11月24日)。論文掲載のスケジュール上、その場で頂いた意見の全てを反映させることは出来なかったが、貴重な意見を下さった参加者の方々に深く感謝したい。

注

- (1) W. レベル『新約外典・使徒教父文書概説』（筒井賢治訳）、教文館、2001年、169頁[W. Rebell, *Neutestamentliche Apokryphen und Apostolische Väter*, München: Chr. Kaiser, 1992, p. 134]。
- (2) 『幼時物語』の翻訳・概論については以下の書を参照。O. Cullmann, „Kindheitsevangelien“, W. Schneemelcher, ed., *Neutestamentliche Apokryphen in deutscher Übersetzung*, 1. Bd.: Evangelien, Tübingen: Mohr Siebeck, 1987⁵, pp. 330–372; B. D. Ehrman and Z. Pleše, *The Apocryphal Gospels: Texts and Translation*, Oxford: Oxford University Press, 2011; J. K. Elliott, *The Apocryphal New Testament: A Collection of Apocryphal Christian Literature in an English Translation*, Oxford: Clarendon Press, 1998; S. Gero, “The Infancy Gospel of Thomas: A Study of the Text and Literary Problem”, *Novum Testamentum* 13 (1971), pp. 46–80; R. F. Hock, *The Infancy Gospel of James and Thomas: With Introduction, Notes, and Original Text Featuring the New Scholars Version Translation*, Santa Rosa: Polebridge Press, 1995; U. U. Kaiser, „Kindheits Erzählung des Thomas“, C. Marksches and J. Schröter, eds., *Antike christliche Apokryphen in deutscher Übersetzung*, 1. Bd.: Evangelien und Verwandtes, 2. Teil., Tübingen: Mohr Siebeck, 2012, pp. 930–959; P. Vielhauer, *Geschichte der urchristlichen Literatur: Einleitung in das Neue Testament, die Apokryphen und die Apostolischen Väter*, Berlin: Walter de Gruyter, 1978; W. レベル、前掲書 [Rebell, *op. cit.*]、八木誠一・伊吹雄「トマスによるイエスの幼時物語」、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 第6巻 新約外典 I』教文館、1976年、115–138、392–399頁、同「トマスによるイエスの幼時物語」、荒井献編『新約聖書外典』（講談社学術文庫）、講談社、2016年、43–52、475–477頁、安川哲夫「幼少年期イエスの教育について——外典『幼時福音書』の分析」、筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻『教育学論集』9（2013年）、99–129頁。ここで、以上の論考に依りながら幼時物語についての概論をごく短く記しておく。本書の成立場所は一切の手がかりを欠くが(“the large area known as the Greek East of the Roman Empire”, Hock, *op. cit.*, p. 92)、成立年代を紀元2世紀の終わり頃と想定する学者が多い。教父エイレナイオス（紀元130–200年

頃)が、本書の一部を指すと思われるイエスと教師のギリシャ文字についての議論のエピソードに言及をしているからである(『異端反駁』1. 20. 1)。ただし、エイレナイオスは個別伝承に言及している可能性が高く、これだけでは成立年代の確固たる証拠とは言い難い。教父ヨハネス・クリュソストモス(紀元340-407年頃)の説教にも本書への言及があることから(『ヨハネ福音書説教』17.3)、成立年代は2世紀後半から4世紀と幅を持たせておくことが、現時点では妥当だろう。本書は「私、イスラエル人トマス」(1:1)という言葉で始まるが、成立年代が上記のように想定される以上、正典福音書が言及するイエスの弟子トマス(マタ10:3、マコ3:18、ルカ6:15、ヨハ11:16等)が実際の著者ではあり得ない。「全ての異邦の兄弟に、私たちの主イエス・キリストの子どものころのことを……語らなくてはならない」(1:1)という書き出しや、ユダヤ教の教育システムの誤り(ラビとイエスがギリシャ文字について議論する! <6:3-4>)からして、著者は非ユダヤ人であり、使徒トマスの名を借りた偽名の書物だと考えるべきである。著作原語はギリシャ語かシリア語のどちらかだが、学者の間で意見の一致を見ない(私見ではギリシャ語の可能性が高いように思われる)。『幼時物語』は写本の数が多く、長短2種類のギリシャ語写本(全14点)に加え、シリア語、ラテン語、グルジア語、アルメニア語の写本が存在する。2種類のギリシャ語写本はC. von Tischendorfの再構成に基づき、一般に、全19章から成るものがギリシャ語版A(15世紀のボローニャ版とドレスデン版の写本に基づく)、全11章から成るものがギリシャ語版Bと呼ばれている。本論文は、いわゆるオリジナル・テキストの再構成には一切取り組まず、ギリシャ語版Aを基にしたHockの校訂本(Hock, *op. cit.*, pp. 104-143)を底本として用い、以下『幼時物語』という際には基本的にこれと同一視する(ただし筆者の判断で異読を採用した箇所がある)。日本語では既に八木誠一による翻訳が2度公開されているが(上述)、八木とは用いる底本が異なっていることもあり、本論文で『幼時物語』から引用する場合は全て私訳を用いる。なお、章節の番号もHockの校訂本に従うため、八木の翻訳とは節番号がずれる。

- (3) 八木「トマスによるイエスの幼時物語」476-477頁。

- (4) 「懲罰奇跡」について詳しくは、佐藤研「イエスの『呪い』——『枯らされる無花果の木』の物語」、同『はじまりのキリスト教』岩波書店、2010年、171-185頁を参照。この種の奇跡として、例えば旧約では列王記下2:23-24、新約では使徒行伝5:1-6; 13:6-12、新約外典では『ペトロ行伝』2、15、32、『ヨハネ行伝』84-86等を参照。正典福音書のイエスの奇跡物語の中で、唯一懲罰奇跡と見なしうるものは、無花果の木をイエスが枯らす物語（マコ11:12-14, 20-21; マタ21:18-22）のみである。しかし、この物語は、人間を懲罰の直接の対象としていない。
- (5) Kaiser, *op. cit.*, p. 941.
- (6) 「個々のエピソードの主眼は、粗野かつ扇情的な仕方ではイエスの奇跡能力を強調することである。これらが正典福音書に見出される伝承に従っているとしても、……『幼時物語』の奇跡は気まぐれで破壊的である」（Elliott, *op. cit.*, p. 68）。また、安川、前掲論文、103頁を参照。
- (7) 本書第2章でイエスは川の水を集め清くし、粘土から雀を作る。この奇跡物語は明らかに神による天地創造を意識しているだろう（特に創1:9; 2:19）。「物語は明らかにイエスの驚くべき奇跡の力がすでに子ども時代から発揮されていたことを示すために構成されている」（Ehrman and Pleše, *op. cit.*, p. 6）。
- (8) Cullmann, *op. cit.*, p. 361. 傍点は引用者。
- (9) Vielhauer, *op. cit.*, p. 674.
- (10) 上記のエイレナイオスの言及からして、幼時物語とグノーシス主義の関係は長年議論の中心であった。本書とグノーシスの関係を強く肯定する学者は、上述 Cullmann の他に Elliott がいる（Elliott, *op. cit.*, pp. 69-70）。他方、グノーシスとの関係を否定するものは Ehrman and Pleše, *op. cit.*, pp. 5-6; Kaiser, *op. cit.*, pp. 939-940. 本論文では、この問題に立ち入って考察しない。
- (11) Ehrman and Pleše, *op. cit.*, p. 6.
- (12) このような方向の解釈として興味深いのは、レベルのトリックスター論を用いた解説である（レベル、前掲書、171-173頁 [Rebell, *op. cit.*, pp. 134-136]）。レベルによれば、宣教に座を持つ正典福音書の奇跡物語は、世の不条理に対する民衆の宗教的な不安を十分に解決できなかった。そ

のためにドグマ的に宣教される大人のキリストの傍らに、子どものトリックスターを配置した、と言うのである。しかし、文化人類学や神話学が提示するトリックスターは、「いたずら」や「悪ふざけ」それ自体に意味があるのではなく、むしろそのような行為によって自らよりも強い者を笑い、支配道徳や秩序を神話や物語の内部で転覆させるところに意味がある（レベルがトリックスターを見事に体現しているとして提示するチャーリー・チャップリンも、映画や演劇の中でただ「悪ふざけ」をしていたのではなく、それを通じてナチスに挑戦していた）。そうだとすれば、神学者 H. コックスが言うように、トリックスターの概念は、むしろユダヤ教やローマの支配秩序に挑戦する正典福音書のイエスにこそ当てはめられるべきであろう（H. コックス『愚者の饗宴』（志茂望信訳）、新教出版社、1971年 [Harvey Cox, *The Feast of Fools: A Theological Essay on Festivity and Fantasy*, Cambridge: Harvard University Press]、213-241頁参照）。さらに言えば、レベルは「少年イエスの行動の予測不可能な点」がトリックスターのスタイルに一致すると述べるものの、これは先に批判した「物語の一貫した筋がない」という観察に基づいていて、筆者としては同意できない。本論で指摘するように、『幼時物語』には、「懲罰奇跡→治癒奇跡」という明確な「一貫した筋」が存在する。

- (13) 荒井献「新約聖書外典——その意義と文学的・思想的性格」、『新約聖書外典』、11-21頁、その18頁。
- (14) 『幼時物語』を「イエスの成長物語」として理解しようとする自体は決して筆者のオリジナルの発想ではなく、すでに教育学者の安川哲夫によって、そのような視点からの論考が公にされている（安川、前掲論文）。本論文執筆に際して学ぶことが多かった。ただし、この論文は、『幼時物語』のギリシャ語原文を参照しておらず（101頁）、「イエスの教育」を重視するためか、イエスと教師のエピソードの分析に重きを置きすぎる嫌いがある。この結果、奇跡物語に対する分析が一切なされない。これに対して本論文が試みるのは奇跡物語の分析である。
- (15) レベル、前掲書、169頁 [Rebell, *op. cit.*, p. 133]。Cf. Hock, *op. cit.*, p. 92; Vielhauer, *op. cit.*, p. 674.
- (16) ただし2、11、12、19以外の章はイエスの年齢を明記しておらず、その

部分は前後のつながりからの筆者の想定。

- (17) これは、『幼時物語』の一貫した筋を否定するレベルも認めている（レベル、前掲書、169 頁 [Rebell, *op. cit.*, p. 133]）。
- (18) Cf. Gero, *op. cit.*, pp. 59–61.
- (19) 安川、前掲論文、120 頁。
- (20) 筆者が「その他」に分類した 2、11、12、13 は治癒奇跡とは呼べないものの（Gero の言葉では “simple, short miracle stories,” Gero, *op. cit.*, p. 60）、2 を除き人の役に立っていることに注意。
- (21) 「奇跡少年が引き起こす災いは、後半では減少する」（Vielhauer, *op. cit.*, p. 674）。
- (22) 佐藤、前掲書、175 頁。Gero, *op. cit.*, p. 60 にも同様の指摘がある。
- (23) 特に、三つの懲罰奇跡が全てイエスの発言の後「すぐに」実現することに注意。佐藤、前掲書、175 頁によれば、ギリシャ・ローマ世界にも、力ある人物の呪いとその最終的な実現の物語は存在するものの、呪いとその間髪を入れぬ実現の物語は稀で、このような懲罰奇跡の物語様式はユダヤ教・キリスト教信仰世界に特徴的な類型である。
- (24) Gero, *op. cit.*, p. 60 も正しく指摘している。
- (25) ギリシャ語版 B は、少年がイエスに向かって石を投げたことにしている（Hock, *op. cit.*, p. 109 の欄外註参照）。これは明らかに相手の少年の「理不尽さ」を強調することで、イエスの懲罰奇跡から「理不尽さ」を軽減するための改変であろう。
- (26) 本論文では、ἀγανακτέω を「怒る」、πικραίνω を「腹を立てる」と訳し分けた。
- (27) この言葉は正文批判上大きな問題がある。我々の読みを記すのはギリシャ語版 B で、ギリシャ語版 A は「私はあなたの話すことがあなたの言葉ではないことが分かっている」と記しているのだ（Hock, *op. cit.*, p. 110 の欄外註参照）。どちらも文脈上意味は通じるが、本論文では校訂本にならないギリシャ語版 B の読みを取る。この場合、「私の話すこと」とは、前章で人々が「その言葉はみな成就する」と言っていることから（4:3）、明らかにイエスの「呪いの言葉」を指す。そうであるならば、「私の話すことが私の言葉ではない」とは「私は意図して呪いの言葉を言ったわけ

ではない」との「言い訳」の意にも取れるだろう。あるいは、「私の言葉は、私の意図の表現ではなく、むしろ神の決定だ」との意に取る方がより蓋然性が高いだろうか。後者の場合も、全く理不尽な呪いの言葉を、自分ではなく神の責任に帰しており、「言い訳」の意に取っても問題なかろう。

- (28) 安川は、「ヨセフが年老いていて、イエスとの年齢差があまりにも大きかったことも家庭での躾や教育が失敗した原因の一つだったかもしれない」と根拠のない想像をしつつ（周知のように年老いたヨセフを語るのは、『幼時物語』とは何の関係もない新約外典『ヤコブ原福音書』である）、イエスを「何一つコントロールできないでいる父ヨセフは、いわゆる“ダメ親父”で」あり、息子を手に負えない、息子の扱いに希望を持っていないと感じたので教師に預けたと言うのだが（安川、前掲論文、121頁）、イエスと教師のエピソードにあまりにも重きを置きすぎるために、現代的な「親子の葛藤」を読みこみすぎである。『幼時物語』は、イエスの「非行」の原因を父親に帰していないし、父親の言うことを一切聞かない「非行少年」イエスを描いてもいない。
- (29) Hockの校訂本はこの読みを採用していない。
- (30) 従って、イエスと教師のやりとりを一様に「対立」と取る安川の理解は、やや的外れしている（後注も参照）。つまり、第1の教師とのやりとりをきっかけにイエスの奇跡が懲罰奇跡から治癒奇跡に変わることから明らかのように、イエスはきちんと（？）社会性を身につけて成長していると言える。
- (31) 安川は、6-7章、14-15章にそれぞれ語られるイエスと教師のやりとりが、「物語の展開上きわめて重要なターニング・ポイントを成す」とし、「イエスの奇跡→学校教師との対決→新たな局面の展開」という物語構成を指摘している（安川、前掲論文、120頁）。だが、安川の論では、14-15章の後に一体どのような「新たな局面の展開」が起こっているのかが理解し難い。安川は、15章以降、「イエスはその力をより高次のレベルで発揮して」、8-13章までは「比較的身近な人のために力を使うだけであったが」、16章以降、「今や彼は救世主イエス・キリストとして、人類の救済のためにその力を振り向けていく」（122頁）と言う。しかし、これは明

らかに言いすぎである。屋根から落ちた子どもを生き返らせるより、死んだ赤ん坊を生き返らせる方が「高次のレベル」だとは言えないだろうし、17章以降の治癒奇跡が全て「比較的身近な人」を対象としているという点を見逃している。筆者は安川の見解を必ずしも全面的に否定しようとは思っておらず、実際、6-7章の前後でイエスの奇跡の性格が一変することは本論でも指摘した通りである。しかし、『幼時物語』を「イエスと学校教師との対立をモチーフとして構成された物語」だと理解することは、イエスと教師とのエピソードにあまりに重点を置きすぎていると言わざるを得ない。「物語の展開上きわめて重要なターニング・ポイント」はむしろ、懲罰奇跡が治癒奇跡に変化する8章だと考えるべきである。

- (32) 「自分がやったのではない」というイエスの言葉は、ギリシャ語版Aには欠けており、ギリシャ語版B及びラテン語写本に見出される。しかしこの言葉を抜いた状態で9:2を訳すと、文のつながりがおかしい（新約学の正文批判の原則からすれば文意不鮮明な方を元来の読みとすべきではあるが……）。
- (33) 確かに『幼時物語』の中盤には、他のものとは独立した、そして最後のイエスの懲罰奇跡が語られている。イエスが、自らの頭を叩いた教師を呪うのである（14:2）。ここで懲罰奇跡が再び登場することは、一見、複数の奇跡物語がランダムに配置されているという観察を補完しそうではある。しかし、この懲罰奇跡は、冒頭の三つと比べて性質を異にしている。第一に、「懲罰奇跡特有のモチーフの一つ」である「霊能者による叱責および懲罰宣言」がここには欠けている。これは冒頭の三つの懲罰奇跡にはかならず付随していたものである。第二に、『幼時物語』においては、イエスの懲罰奇跡と分かちがたく結び付いていたイエスの「怒り」の感情がない。むしろ、ここで怒っているのは教師の側である（14:4「教師は怒って少年の頭を叩いた」）。この2点は、おそらく14章に語られる懲罰奇跡から「理不尽さ」を軽減するための工夫だと考えられるのである。少なくとも、教師の側が最初にイエスに「理不尽」な振る舞いを加えている。また、この懲罰奇跡はイエスに「体罰」が加えられるという点で明らかに3章に記された第3の懲罰奇跡と並行している。それだけにイエスの「怒り」の感情に言及がないことが重要である。イエス

- は確かに教師を呪うが、もはや、怒りに身を任せて、理不尽に呪うことはしなくなったということである。この中盤に語られる懲罰奇跡は明らかに成長したイエスを物語るための意図的なものであると考えられる。
- (34) ただし、4:3と17:4では、ギリシャ語が1単語だけ異なる。
- (35) 佐藤研「聖書学は〈イエス批判〉に向かうか——『宗教批判の諸相』に寄せて」、同『最後のイエス』ぶねうま舎、2012年、128頁。
- (36) Elliott, *op. cit.*, p. 68.
- (37) Cf. Kaiser, *op. cit.*, p. 941.
- (38) 従って、筆者には、『幼時物語』とグノーシス主義あるいは仮現論との関係には否定的に應える方が良いように思われる。
- (39) 成立年代、著作原語、オリジナル・テキストの確定に加え、周辺世界のヘレニズム文学との比較から本論文の主張をさらに裏付けることが今後は当然求められるだろう。
- (40) 筆者は、2013年4月から1年間、滋賀県のキリスト教主義の私立幼稚園で職員として働いた経験を持つ。その幼稚園では、月に一度、全園児を隣接する教会堂に集めて、「お誕生日会」を催していた。その場では、園長(牧師でもある)が聖書のお話をするのだが、あるとき園長は『幼時物語』のイエスの話を子ども達に聞かせた。筆者はその時の園児達の反応を忘れることが出来ない。文字通り、子ども達は転げまわるようにして笑っていた。筆者自身も、それまでに幾度も正典福音書のイエスの話を子ども達に聞かせていたが、そこからはこのような反応が得られたことはなかった(もちろん話し手としての力不足も大きかっただろう)。この時の光景を思い起こしたことが本論文執筆の個人的な動機である。
- (立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程後期課程在学 おおかわ・だいichi)